☆　子ども会（学習会）だより　☆

MY SKY 第6号　☆　☆

マイ スカイ

1996年５月21日火曜日発行（毎週火曜日定期発行）

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責：吉成正士

汗ばむ毎日‥‥もう夏ですね。天気も気持ちもスッキリって感じですね。でも昼夜の気温差が激しく，風邪をひいてる人も多いようです。気をつけてくださいね。

さて，４号に掲載していた和田さんのことについて，いくつかの感想がよせられましたので，紹介しておきます。

MY SKYを読んで，ふとお母さんが言った言葉を思い出しました。「お母さんも昔，結婚差別にあったんでよ」って言った言葉。

私のところのお父さんもお母さんも昔，結婚差別にあっていた。何か二人ともが強く思える。

お父さんもお母さんも結婚する前に恋愛をしていて，周りの人からいろんなことを言われたらしい。お母さんの相手の人も「もうちょっと若かったら踏み出せとった」っておかあさんに言ったみたい。

私ほんまに部落差別許せんわ。好きな人と一緒になれんかったら，意味ないでぇ。こんなこと言よるけど，私恐いんよ。部落差別が‥‥。なんか想像してしまうんよ，自分が差別受けよるところ。私な，他人の意見に左右されやすいけん，つぶれそうな気がするんよ。普通は結婚やいったら，夢みたいなことで，みんなが憧れとることやけど，私はほんなんではない。なんか「部落やけん」っていうことでいろんなこと言われそうで，何か恐い。結婚するんがイヤなんよ。もし結婚するとして，相手の周りの人から反対されたら，すぐ取り消すと思う。反対を押し切って結婚してもいろんなつらい思いしながら生活していくんは私には無理と思う。私弱いもん。まだ部落差別恐れとるもん。自分がおることに誇りが持てない。それは，自分が部落に生まれたことがイヤな部分と，部落差別に恐れてしまっているからだと思う。こんな自分が最近イヤになる。でも，負けたぁないけん，毎日明るく，楽しく過ごしていっきょる。ほなけどな，やっぱり結婚は，好きな人でないとあかんと思うなぁ。

５月７日３年女子

私は部落の人です。学習会に行っています。私がどうして学習会に行っているかというと自分自身を強くして，これからの私を誇りに思えるようにしたいからです。差別を受けたときに闘えるくらいの力を身につけたいからです。まだまだ知らないことも学習会のみんなやクラスの子と知っていきたいです。

私のお母さんは結婚差別を受けました。お母さんはＡ県からお嫁さんにここにやってきました。だけど一度もお母さんはＡ県のお母さんのところに帰ろうとはしません。どうしてかはわからないけど。

だけどお父さんと結婚したことは後悔してないと言います。(ハイハイ)だって好きな人と結婚したんだもんね。お父さんとお母さんはよく言います。「お前は結婚するときに差別受けるよ。だけどな，お母さんやお父さんはお前を産んで後悔やしてないよ。結婚するときはお前が本当に好きな人と結婚すればいい」ってな感じで‥‥。結婚差別の時に相手の本心がわかるって言ってた。私と本当に結婚したいなら，部落や関係ないって。相手の両親を説得できるくらいの人やって。私自身の値うちや人間性が問われるって言ってた。こんだけいろいろ考えてくれるお父さんやお母さんが好きです。

でも家に帰ると反抗してしまうし‥‥。でもこんな気持ちずっと大切にしていきたい。それと自分自身や周りの人の差別意識を少しずつ少しずつでいいから，消していきたい。

５月７日３年女子

MY SKYを読んで，私のお父さんも結婚差別をしていることが，前話してわかったんだけど，私がもし部落の人と結婚することになったら，許してもらえるように説得することやできるかなぁーって思った。前話したときは，私が全然ダメで，説得とかわかってもらうとかいう段階じゃなかった。もし私が部落の人と結婚するとしても，今の私じゃダメだし，結婚とかいう話にならんかったら，お父さんが差別しててもも，逃げたままだと思う。

今の私は，部落差別に対して「ひどい」とか思っていて，自分のこととして考えれていない。これも思ってるだけだけど，結婚差別に対して「好き合ってる同士なのに家とか世間体とかで自分たちより下に見るような，人のことをバカにした人間の汚い心のために結婚に反対するんやバカげとー。そんなことで反対する権利やない！」

私がこんなこと言っても何にもならんけど，結婚差別にや負けんと，家族や親戚とかを説得してできるだけ幸せな結婚をしたいと思う。

別の学校の子が板中の子はすごいって言ってくれてるけど，私みたいにあんまり成長できてない子もいるから，一緒に成長していけたらなって思う。５月７日３年女子

いろんな感想がありました。他にも「あぁMY SKY読んで，こんなこと感じてるんか」と感心してしまいました。

それぞれの文章のところどころに，みんなと一緒になって考えてみたい部分があります。学級で，家庭で，また話し合い，この内容を深めてみてください。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◇ これからの日程 ◇◇ ◇

24日(金)　輝け板中まつり「体育祭」
28日(火)　『MY SKY 第７号』発行日
30日(木)　１年第１回全体学習年組：資料「だからわるい」
６月１日(土)～３日(月)　中間テスト
４日(火)　『MY SKY 第８号』発行日
６日(木)　学年部落問題意見発表会
11日(火)　校内部落問題意見発表会
『MY SKY 第９号』発行日

※　本誌に掲載している参考文献等についてのお問い合わせは吉成までお願いします。みなさんもしっかりと原本を読んでみて下さい。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◎被差別のカミングアウト（全同教通信「同和教育」より）

同和教育には，全国同和教育研究協議会という会が組織されています。いわゆる全同教というものです。その大会が一昨年行われたのが徳島県であり，昨年行われたのが三重県です。今年はやはり１１月末から，九州の長崎の地で開かれます。

もうあの頃の板中を知る人も少なくなりましたが，あのさわやかな感動は，今でも私の心に焼き付いています。

さて，全同教が毎月発行している機関紙があります。その名も「同和教育」です。その最後のページに，次のような原稿が載せられていました。興味深いので，みなさんも読んでみてください。

なお，作家「みなみあめん坊」さんは，知る人ぞ知る，著名な方なんですよ。

シリーズ 現代の「差別」を考える 139

被差別のカミングアウト

今月の書き手 みなみ あめん坊

小林よしのりさんの漫画『ゴーマニズム宣言』で大きな話題を呼んだ部落差別問題が、解放出版社から『差別論スペシャル』としてまとめられベストセラーになっている。彼は作品のなかで〝ザ・部落ウルトラ解放フェスティバル〟という、被差別部落出身のアーチストがカミングアウト（coming-out）するという提案を行って注目された。

有名な「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ」との全国水平社創立宣言の一節も、このカミングアウトにあたる部分である。小林よしのりが提唱する〝ザ・部落ウルトラ解放フェスティバル〟や全国水平社創立宣言の一節は、なにも被差別自慢ではなく、ともに差別を乗り越えようという具体的提案なのである。ところが私たちの身のまわりにはまだまだ「――人間関係を紡ぐ」とか「心の襞に触れた思いが――」というような言葉酔いの好きな人が多く、わけの分からないままに何かが実践されているような錯覚をするときがある。そんな文学的表現はプロの作家に委ねておいて、本当に分かりやすく、差別を射抜く地平を獲得すべきである。

そもそも、部落解放運動と解放教育運動が高揚期を迎えていた七〇年代に私は部落解放同盟の同盟員になった。そこで私はいつも自分自身を〝狭山世代〟だと規定してきた。東京高裁の第二審の冒頭、石川一雄さんは「私は無実です」と叫んで被差別部落に生まれたカミングアウトをした。これがきっかけとなり、狭山闘争が始まり、全国各地の被差別部落で老人から子どもまで、カミングアウトが大波のように拡がっていったのである。

それまで、水平社宣言の一節を高々と掲げていた人はごく少数で、大半の人々はひたすら被差別部落から脱出を念願切望していたのだ。自らが選択したものではない出自において差別を被ることの異議をとなえ、「部落解放同盟」の名が染め抜かれた黄色いゼッケンをつけ、子どもたちは部落民宣言を行い、同盟休校、ゼッケン登校を行った。老人や大人、青年たちも子どもたちだけでなく、自らも黄色いゼッケンで駅頭に立ち署名活動やデモ行進をしてカミングアウトしていったのである。つまり、被差別のカミングアウトは、差別の現実を隠蔽する社会そのものにたいする告発であり、弾劾そのものであった。その勇気ある行動は、被差別の出自を持たない人々にも共感を呼び、差別を共に乗り越えていこうとする共同の営みが具体化されていったのである。

しかし、あれから二十数年の歳月が流れ、被差別部落をとりまく住環境や教育条件などの整備が進むなかで、狭山闘争で培ったカミングアウトの意義が風化し、かつて同盟休校やゼッケン登校を取り組んだ世代からムラを去って行く現象が生まれている。そしていま、ムラに残った若い親たちは、わが子に子ども会の塾化を求め、やれスイミングで体力づくりだの、これからは英会話の時代だといった具合に世間の動向に左右されている。これではまるで、かつて私が母親から「手に職をつけておけ」と、無理やりソロバン塾に通わされたことと何ら変わりがない。手堅く、そつなくとの親の願いは結局、差別社会の中で被差別の出自に卑下意識しか芽生えさせないのだ。つまり、被差別存在をマイナスと見做す思考の克服が解放運動でも、解放教育の現場でも未だなされていない事実をまのあたりにするのである。だからといって、タメ息ばかりをついていては仕方がない。

テレビのトレンディ・ドラマは若い世代に大きな影響力を持っている。昨年、放送されたドラマで一番話題を呼んだのは〝抱かれたい男・NO1〟の豊川悦司が主演した『愛していると言ってくれ』だった。常盤貴子が愛した彼（豊川）は聾唖者で、常盤は彼とのコミニケーションのために必死になって手話を覚えていく。以後、このドラマを観た若い人たちの間に手話を覚えようとする現象が生まれた。一方で啓発という名のお役所言葉による研修会は閑古鳥が鳴き、同和教育啓発映画はどうもお説教臭く、嘘っぽいとの誇りがあったなかでは注目すべき現象であった。

私は、このドラマを観ながら、部落差別に基づく結婚差別をテーマにトレンディ・ドラマが放送されたなら、小林よしのりが提唱した〝ザ・部落ウルトラ解放フェスティバル〟と同様に、被差別部落の存在をマイナスと見做す差別意識そのものに大きな変化を与え、「なぜ同じ人間が同じ人間を差別するの？」「差別なんてゼッタイにおかしい！」という意見が充満することだろう。そして、この若い力が必ず差別を肯定する世間を変革し、差別する人間は恥ずかしい人間として孤立する世論を生み出すものと確信するのだ。これまでの地道な部落解放運動、解放教育の実践の成果とともに、是非ともこの新しいテーマの実現にむけて、全国のムラや教育現場のあちこちから声を強めてほしいと願っている。

（作家・部落解放同盟大阪府連
池田支部書記長）